二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

メタルイレイザーNEO

METAL ERASER

恥辱のプログラム

小説 神楽陽子

挿絵 ＦＣＴ

MISSION1　出動！　メタルイレイザー　006
MISSION2　真夜中のレン　060
MISSION3　美少女イレイザーたちの危機　096
MISSION4　陵辱の夜会　157

登場人物紹介

Characters

ヒカル＝タチバナ

天才と称されるメタルイレイザーの少女。歳若くして大学をスキップし、メタルイレイザーの資格を得た。プライドが高く、負けず嫌い。

レン＝ヒラサカ

意思表示が苦手な少女。幼い頃はメタルイレイザーの育成施設で日々を過ごしてきた。育成施設での成績はトップ。いわゆる対人恐怖症。

リカ＝テンドウ

メタルイレイザー部隊の隊長。メタルイレイザーとしての実力は最強である。ヒカルとレンに才能を見出し、リカ自ら指導中。

アヤ＝ハヅキ

メタルイレイザー司令室のメインオペレーターを務める女性。彼女もまたメタルイレイザーのひとりであり、リカの右腕。

MISSION2『真夜中のレン』より

ＡＣスーツはバグの侵入を阻むフィールドを張ってあるとはいえ、物理的な感触までは遮断できない。汁気を帯びてヌメヌメとした触手が群れを成して巻きついてくる。

「あく……うっ、んくう？」

バグは人間の生理機能を狂わせる恐るべき存在である、という認識以前に、汚らしい触手に生理的な嫌悪感を催した。先端は弛んだ皮に包まれ、濁った液にまみれた蔓は、少女の手首くらいの太さがある。

固体より半ば液体に近く、肌をべろりと舐められるかのようだ。

「ひぁあっ、くふ、あう……ッ！」

おぞましさに背筋が伸び上がり、うなじがぞわっと逆立つ。魔物の体液はすぐにもＡＣスーツに浸透を開始し、手足で薄生地が粘着する。

ボディスーツの機能がすぐに奪われることはない、プロテクトは作動した。それでも時間が経つほど不利になる、速やかに本部に連絡して応援を要請するべきだ。

だがレンはエイーダを落とされた動揺のあまり、マニュアル通りの対応ができず、バグにＡＣスーツを貪る時間を許してしまった。

まるで女の辱め方を知っているかのように、バグは触手をしならせ、レンの艶が白くてすべやかな太腿をねぶりまわす。

「くっ、や……やめ、て……っはあ」

脚を閉じようにも左右に牽引され、がら空きの内股を丹念に味わい尽くされる。

うら若い少女の肌は高級な白磁のように美しく、液濡れがいやにヌラついた。
「放して、私は……エ、エイーダと……ひあう！」
あられもない太腿を這いあがる触手がそのまま恥部まで届きそうな気配がして、反射的に腰が竦む。線の長くしなやかな脚は、螺旋状にしゃぶられ、締め付けが強い分だけ流動を生々しく感覚させられた。
それこそ巨大なミミズが這うかのような気色の悪さ。
（き……気持ち悪い……！）
堪えきれず振り解こうにも、余計に絡まってしまって脚を外せない。くるぶしが震えて直立が難しく、バランスを失ってレンは後ろに倒れそうになった。
そこをグイッと、両腕を頭上に牽引される。色白で奥ゆかしい美少女イレイザーは、椅子に座るような姿勢で、そのうえ恥ずかしく脚を広げさせられた。
「なっ、何をするの……ぁくう？」
育ちがよく普段から自然と内股でいるため、みっともない蟹股を取らされるだけでも恥ずかしい。トイレの際でも太腿を水平にここまで伸ばすようなことはない。
両腕とも首の後ろに反らせて、実り豊かな巨乳を前に強調し、股座には風を素通りさせる恥辱のポーズは、深夜の遊園地で誰かが見ているはずがなくとも、令嬢の繊細な感性を羞恥の炎で燃え上がらせた。
（こんな、はしたない格好で……）

股布の幅はたったの三センチ、しかも強引な開脚姿勢のためにクロッチが伸びて、乙女の縦筋にみっちりと食い込んでしまう。無毛の女穴は刺激を抵抗なく受け入れ、冷えた夜風が通るたび、局所の蒸れ具合と過熱を最大限に感覚させられる。

両腕は頭の上できつく結ばれ、滴り落ちてくる魔物の体液から逃れられない。粘り気の強い汁が純白の薄地にみるみる染み渡って肌に吸いつく。ＡＣスーツに吸水性はほとんどなく、玉の雫が次々と肢体を伝った。

たおやかな細身には大きめの、たわわな乳果が、アンバランスな体勢のせいでずっしりと感じられる。陵辱者にとって曲線は、締め甲斐のある格好の的であり、バグは二個しかない乳房の捕獲を競った。

「ひあっ、あ……んくぅあああ！」

ウエストを斜めに登った触手が、布地がなく裸の谷間を下から貫いて、右の乳房の麓に食い込む。輪を作って、もぎ取らんばかりに美乳の根元を締め上げる。

「ん……んふぅうッ？」

異液がボディスーツに染み込む汚辱感の中で、思いもよらない快美が閃いた。肩に突き抜ける熱と痺れはレンにとって初めての。

抗う力をごっそりと奪われ、ほんの一瞬、腕の筋が緩んでしまう。

（い、今のは……？）

性感帯の刺激にまったく不慣れな令嬢は、それが牝の本能的な快楽であるなどと露とも

思わなかった。豊乳はサイズに比例して、一度に感覚できる触手の数が多く、二本、三本と加わってもすべての蠢きを追うことができる。
左の乳房は膨らみの半ばを括られ、曲線を断ち割られる。谷間にはもう一本が無理に身を捻り込んで乳谷の容積を圧迫した。
「はあ、あ……んはあ！」
ずるずる、と触手が体液を引きずって動くたび、肉体が火照ってゾクゾクとする。悪寒にしては熱っぽく、腕の力がまた抜けそうになる。
頬はほんのりと紅潮し、桜の花びらのように可憐な唇は湿って、生温かい吐息を不規則に漏らした。長睫毛がいつもより下にくる。
エイーダに怪我をさせた罪悪感と、我が身の危険に心が落ち着かず、レンはまだ動揺を振り払うことができなかった。
「エイーダを、たっ……助けなくちゃ、はあ、いけないのに」
脳裏はぐちゃぐちゃに混濁し、何百回、何千回と反復したマニュアル通りの対応が即座に取れない。その間にも初めての快楽に肉体を蝕まれていく。
意識になかった乳芽が急に疼き始めた。
「はやく……んふあ？」
ホワイトの薄地に陰影が浮かぶ。小突起がしこってスーツの裏面を引っ掻きまわす。
湿って吸着するボディスーツは衣擦れを生じ、敏感な乳頭に巧みなこそばゆさと小さな快

感を与えた。
（カラダが、変……どうして？　力が入らない……！）
触手に乳肉を押し揉まれると、電圧が膨張し、肺が圧されて呼吸が乱れる。まるでマラソンでもしているかのような動悸だ、しかし苦しさはない。
「んはあっ？　はぁ、あふ……んふぅはあ！」
吐息を呑み込もうとしても、喘ぐ咽が押し出し、疲労の声は歌声のようにトーンが高くなった。触手の網から双乳だけを外に出し、悩ましく悶える美少女イレイザーの、下半身にもバグは無遠慮に蔓を伸ばす。
ＡＣスーツは機能の半分を奪われ、電子フィールドが解けてしまった。
『侵食率が五十パーセントを超えました。直ちにＡＣスーツを破棄してください』
バイザーにはそのように警告が表示されるが、身動きできない。とうとう触手は薄生地の裏にも入り込み、男を知らない少女の初心な肉体を餌食にする。
ＡＣスーツの裏にまわった数本は、レッグホールから太腿を舐めなおし、レンの無防備な開脚姿勢に網目模様を巡回させた。
ヌチャ、ヌチャと異音も鳴らしてスーツの中を泳ぎまわり、レンの下半身と戯れる。括れた胴にも腐肉が巻きついてイレイザーは全身を束縛された。
「っく、んふう……？」
痛みを予想して息んでも、まったく別の刺激に襲われる。悪寒とも異なる類の、微弱な

震えが背筋を駆け上がり、脳が張った耐久の真後ろをくすぐり立てる。
敗北を悟ったレンは呻く声で呼んだ。
「はあ……エイー、ダ、早く……ここから逃げて……！」
せめてエイーダだけでも。バグの狙いはあくまで人間であって、動物ならば逃げても執拗に追われることはない。
ACスーツにはバグの体液がたっぷりと染み渡り、全身をぬかるみに浸されたかのようで、多すぎる汁は重力に逆らってまで肌を這いあがった。
警告の文字がエラーを起こす。
『侵食××五十×破棄を×ACスーツして×××ORC・ORC・ORC――』
割り込んできたアルファベット三文字を見て確信する。
（……オロチのバグ？）
これは例のハッカー集団・オロチが作成したバグだ。人為的なものだから、自然発生では考えにくい時間と場所でも出現したのである。
オロチバグは触手を脈打たせ、先端の皮を破るように捲った。そこから赤黒く腫れた別の器官が歪な姿を現す。形は茸の傘のようで見るからに毒々しく、頭頂には小さく尖った割れ目があって、そこから体液とは別の、黄ばんだ汁をブニュッと生む。
青臭いにおいが眼に染みた。
「な、何なの……私に何を……うッ？」

臭気が出入りして鼻の奥がツンとする。急に噎せて肺と胃が気持ち悪くなる。まるで内臓そのものを汚い色で染め上げられるかのような。

それほどの不浄感を従える魔根が、うぞうぞと群れ、火照り始めた少女のうら若い肉体に殺到した。両腕を吊るされたレンの、腰と首筋にもシュルッと巻きつく。後ろ髪を時計まわりにかきあげられる。

「あぅ……んふう、嫌……や、やめて……！」

垂れ落ちる異液が肢体にべっとりと粘着した。肌に感じるボディスーツが濡れそぼってきつくなり、胸元や股座では露出の境界線が感覚上に浮かび上がる。

熱っぽい肉体は微風にもゾクッと敏感に反応し、呼吸のリズムを狂わされた。

「っはあ、はあ……く、ぅくう！」

フロントデルタの股上から、肉太の一本が女の大切な部分を目指して潜り込む。反射的にレンは眼を瞑り、できる限りかぶりを振った。

「やめてっ、何をして……ひあっ、あ……んぁあッ？」

性毛を剃ってあるわけではなく、元から生えていない幼い入り口をノックされる。感覚を断ち切ろうとしても、意識するほど刺激はかえって脳に伝わり、女の弱点を強烈に自覚させられるのだった。

（また……痺れる、カラダが、ど……どうして動かないの……？）

緊縛されているから動けないのではない。四肢に思うように力が入らなくて、せっかく

息んでも、気がわずかに緩むだけで一からやり直しになってしまう。
うねる触手に股間を探られ、壺口を舟形に押し拡げられる。薄い股布は雁太の形に盛り上がり、さながらレン自身が股間からホースでも垂らすかのようだ。
恥部の露出をまさかと疑って、こわごわと眼を開く。肌で感じた通り、純白の逆三角形は下向きに縒れて、綻ぶ牝穴がちらりと見えた。
「や……そ、そんなところ」
育ちがよいだけに、室内であっても股間を晒すのは躊躇われる穴だ。それをこのような場所で、道の真中で堂々と。人が見ていなくとも、露出には反射的な拒絶があり、猛烈な羞恥に多感な心を逆撫でされる。
心臓がバクバクと暴れ、息継ぎは一回で酸素を取り込む量が多くなった。
肉唇が横にまろび出て、薄紅色の性粘膜に外気を招き入れる。真夜中の冷たい空気が膣内の発熱を実感させる。恥骨の下には、臍に向かって疼きを漲らせる小道があり、入り口は熱い液体をとろりと分泌した。
（う？　な……何なの）
小水に似ても異なる、意志では食い止められない生理的な吐蜜の正体がわからない。失禁してしまったのかと思う。
かあっと顔じゅうが真っ赤に染まり、わななく唇は言葉を迷った。
「待って、どうするつもり……やっ、あぁあ」

少女の抵抗など構わず、バグは陵辱をより過酷にする。
ズブリ、と体内に異物が侵入を開始した。
「んくぅはあああ⁉」
痛みがかりそめでしかない拡張感が壺口で芽生える。刺激にまったく不慣れな性感帯が驚いて、ビリッと電流を走らせる。レンは堪えきれない喘ぎを吐き出し、のけぞらせた上半身に巨乳を乗せた。
「ひあっ、んふう……く、んぐぅう……ッ！」
零れそうになった涎の糸を噛み切って、歯列を合わせ、細眉を逆立てる。全身で過剰な汗が湧いて外気を遮断し、肉体は燃えるくらいに過熱する。
ズブ、ズブッ、ズブ！
女として清らかでなければならない部分を、汚らわしい怪物の玩具にされる嫌悪。だがバグ相手にいくら拒絶の意思表示をしたところで。
「やめて、や……そこはっ、あっ、んぁあ？」
悪意に満ちた存在は、女の抵抗を愉しむように触手を捻り、濡れた膣筒を穿りまわす。
肉壺の狭さよりも魔根のほうが太く、新たな拘束具にもなった。
「ひあっく、うぐ！　あ……ひあ、んぎぃいいいッ！」
不意に鋭い痛みが走る。膣内で膨らむ物量は処女膜に差し掛かり、純潔の証を今にも突き破ろうとした。歯を食い縛ったレンの脳天を破瓜の衝撃が揺るがす。

MISSION3『美少女イレイザーたちの危機』より

だがここは市民プール、それも自分ひとりだけがプールを独占し、他の客は全員が注目している状況である。平日だった先日とは人数も比較にならず、衆人環視のプレッシャーは何倍にも膨れ上がった。

（何十人いるのよ……百人よりもっと？）

かあっと顔が熱くなって頬を上気させる。表情は困惑の色を浮かべて、強気だった愁眉を八の字に倒し、瞳は水平より上を見ることができなかった。

できるものならプールに首まで浸かって身体を隠してしまいたい、しかし魔物の不気味な滞留がそれをさせてはくれない。バグはすべやかな太腿を執拗にねぶって、瑞々しい肌を勝手に堪能し、獲物の感度を高めていった。

「っんふう！　……ひはあ、なん……なのよ、コイツ……？」

敵の意図が読めないため不安になり、流動の向きを余計に意識してしまう。太腿を擦り合わせるように脚を閉じても、液体バグの股間通行を食い止めることはできず、火照り始めた肉体は物足りない刺激にいっそう焦らされた。

腰が疼いて、水面にお尻を浮かべる角度をしきりに変える。股下に打ち寄せる波が心地よく、脚を開いて戯れてしまいたくなる。

（な……何考えてんのよ、あたしは……っくう！）

ヒカルは肩幅を前に狭めて、乳房の両脇に腕を食い込ませ、たわわな量感で観衆全員の目を一斉に引き寄せた。そのつもりがなくとも弾む肉体を止められない。

「はあっく、ハヅキ……さん、早く……んくふう！」
呼吸の乱れとシンクロして双乳が揺れ、重量が肩にくる。あと少し、片足ずつ持ち上げるだけでプールサイドにあがれるのに、これでは迂闊に開脚などできなかった。バグの蠢きが秘園に殺到しようものなら。
身を捩るたび、濡れたおさげが乱れて細身に絡みつく。白金色のロングヘアは雫を、遠まわりにゆっくりと肢体に伝わらせ、少女の濡れ姿を蠱惑的に彩った。
そうして羞恥心をいたぶられながら。
ニュルッ、ヌルヌル……ズブッ！
「――ぁあ⁉」
予想もしなかったところに奇襲を受ける。あくまで洗浄目的のバグが、ヒカルの排泄器官、アナルに潜り込んできたのである。
考えるだけでも汚らわしく恥ずかしい尻穴を強烈に意識させられる。
「ちょっと、ウソ……やっ、入ってこないで……くふう！」
体内への侵入を観衆に暴露してしまったのを自覚するどころではなく、括約筋をキュッと力ませる。しかし黒い液体は抵抗などすり抜けて直腸に流れ込んだ。
ヌチュヌチュヌチュ！
排泄時に特有の過熱が肛門一帯に集中し、今にも中身を吐き出そうとする。
ヒカルは真っ青になって瞳を強張らせ、奥歯をギリッと噛み締めた。

（何も、おっ、お尻の中に入らなくたって……！）
プールを漂うバグの量がみるみる小さくなっていく。逆に腸内の物理的な圧迫感は膨張し、水中にもかかわらず重量を感じさせる。バグは排水口に吸い込まれるようにヒカルの尻穴に直行し、消化器官を無理に逆行した。
「だめ！　そんなに……入るわけっ、うぐ……んぎぃいいいッ！」
やがてプールの水は透明になり、澄んだ色を取り戻す。
代わりに大量のバグを肛門に蓄えるはめになったヒカルは、全身で汗を湧かせ、水面下では両脚を後ろに引き攣らせた。足の指がぎりぎり底に届く角度で踏ん張り、後ろの穴にありったけの力を込める。
「く……はあっ、んぐぅううう……！」
この姿勢を少しでも崩そうものなら決壊する。バグだけでなく排泄の生理そのものが直腸を蠕動させ、何度も出口に拡張の気配を差し込んだ。
苦悶の理由を一般市民には勘付かれている。
「入ったって……もしかして？」
「昨日もお漏らししたっていうし、あのカオってやっぱり……」
歯を食い縛って眉も歪ませる顔がますます赤面する。口にするのも憚られる、放尿とは次元の違う背徳性が多感な心を責め立てた。
（こんなとこで、そ、そっちのお漏らしなんかしたら）

バグもアナルの中でひっきりなしに暴れ、極限状態に追い詰められる。
だが苦しいばかりではなく、腸内洗浄は女の快楽に近い官能をもたらした。
「はぁ……う？　くうっ……んはぁ」
次第に歯列が緩んで、我慢するにしては色っぽい吐息が溢れる。
腸粘膜は異物による刺激に弱く、中身は液体だけに一切痛みがないため、感じてはならないものを如実に感じてしまう。ヒカルは背をのけぞらせ、首を捻って喘いだ。
（ど……どうなってんの？）
女の官能に似て、排泄の原始的な快楽と紙一重の快感。結腸孔まで達してうねる異物が腸筒全体を、グッチャグッチャとかき混ぜ、熱痺を起こす。意識になかった悦びに脊髄を打たれて、腰が跳ね、濡れ光る肢体をくねらせた。
「んふぅううう！　は、はぁ……んうッ！」
力を緩めてしまえ、という誘惑は強迫観念にもなって、軋み始めた理性を襲う。アナルが無性にくすぐったくなる。
肉体は水の冷たさを忘れて熱化し、発情の導火線に火が点いた。
（カラダが……ぁ、熱い……？）
胸の双角がツンと勃ち、知らず知らずヒカルは二の腕で双乳を揉みしだく。柔らかな乳果と白いお腹に玉の雫をとろとろと流し、肌に湿った薄生地を擦れさせる。
つらいのは肛門だけで、乳頭は硬くしこって疼きを競わせ、前の穴でも意図にない蜜の

分泌が始まった。ヒカルの中に眠った牝の性を揺さぶり起こす。
バグにアナルを食い荒らされて。それを一般市民に目撃されて。悔しくて恥ずかしくてたまらないはずなのに、肉体は性的興奮に昂っていく。
「んはあっ、んむう？　ひあ……あっ、んく……んむふぅう！」
自分しか知らない排泄器官を好き放題にされる屈辱も、悶える肉体を不特定多数に観察される恥辱も、官能の大きなうねりに呑み込まれた。跳ね上がる鼓動は、ヒカル本人の意志とは無関係に性感帯に血潮を滾らせ、水に濡れた肉体は感度を増す。
「ぁふう……あっ、んぁあああ」
唇と一緒に後ろの穴まで緩みそうになった。出口の狭さを太さで上まわる圧力が、肛門付近に押し寄せ、そこだけ異常に熱化する。
回転もするバグはアナルを隅々まで洗浄し、倒錯した肛悦を目覚めさせる。その穴で感じるはずがない、とわかっているつもりでも、肉体は快楽に正直な牝痺れを漲らせ、脳裏には淫らなムードが訪れた。
（なんで、オシリなのに……オマ〇コみたいになって……）
まるでこのまま果ててしまうかのような。アナルを荒らす悦感を感覚上から完全に断ち切ることができず、それどころか官能は高まるばかり。股下で水面が揺らめくだけでも敏感に反応し、自らの体液で股間を濡らす。肛門一帯は中の物量に押されて膨らんだ。
深紅のボディスーツはどこもかしこも滴るくらいに濡れそぼっており、ヒカルが両腕で

押し上げる乳肉にも吸着する。幼い作りの相貌には少々不釣り合いな巨乳は、先端の突起をむくりと起き上がらせ、自覚のない空腰にシンクロして豊かに弾んだ。

「はあっ、はぁ……んっく、ふあ……と、止まって！」

赤色の薄生地が剥がれそうで、皮むき林檎のようにも見える双乳が、乙女の肉感を最大限に魅せる。原型を失って肩の前にも流れるポニーテールが、ほつれて、乳房に巻きつく姿は自虐的でもある。

「んっふ、ひはぁ、らめ……んあっ、あぁ？」

乱れた呼吸は矢継ぎ早になって、肺をひっきりなしに膨縮させ、心臓が打楽器のように鳴る。悩乱を極めてヒカルは、お尻でジャブジャブと水面をかきまわし、唇に添えた人差し指を甘く噛んだ。

（どうしよう……とっ、とめらんない……！）

限界状態の熱い尻穴にプールの水を衝突させるのが、心地よくて、淫らな水遊びの虜になってしまう。もう一回だけ、という浅はかな考えが多くなる。

出口には高温の物体が溜まり、肛門を挟んで水の冷たさを実感した。

「はあ……やだっ、オシリで……イ、イっちゃう……ッ！」

尻穴がヒクヒクと疼いてたまらない。それが排泄の欲求なのか、絶頂の予兆なのか、判断できなければ、思考するだけの余裕もない。身体が重心を失ってふらつく。上下の感覚が狂って視覚の遠近もばらばらになる。

（も……もう、ダメ……）
衆人の驚く顔がいやに近くに見えた。
「ヒカルちゃん、バグは？　バグはどうなったの？」
「トイレならこっちだよ、こっち！」
特別蔑視されているわけではない。そうではないからこそ、醜態を晒したくない気持ちが強くなる。だが排出に慣れすぎた器官は、本人の事情などまったく無視し、この場で出口を開こうとする。
水面下で両脚がひとりでに、左右に伸びて股を大きく広げ、病的な痙攣を走らせた。肛門に押し寄せる圧力を食い止める支柱となっていた、脚の支えがなくなってしまう。
「ッあぁう⁉」
視界がぐるんと旋回した。
（出したくないのに……イきたくなんか、ないのに……！）
恥辱に心がへし折れそうになったところを、生理的な意欲に突き破られる。最後の最後まで拒絶して、負ける勝負とわかっていても、敗北するのはやはり屈辱だった。
「あ……ああっ、んぁあああ」
唇をわななかせ、瞳を慄（おのの）かせる。知っている感覚をまさかと疑う。
尻穴は中身を吐き出してしまった。
ヌチュヌチュヌチュヌチュヌチュヌチュヌチュヌチュヌチュヌチュ！

みっともない音を立ててバグをひり出す。
始まった生理現象を止められるはずもなく、ヒカルは、我慢に比例して強くなる排泄の恍惚に脳裏を制圧された。
「イクぅ！　お……オシリでイっちゃうぅうううぅぅぅうううう――――ッ！」
噴出は勢いが凄まじく尻布まで破り、真っ黒なバグを水面上にもしぶかせる。
ブチュブチュブチュブチュブチュブチュブチュブチュ！
疲弊しきっていたヒカルは快美感に翻弄され、たまらず感嘆の嬌声をあげた。
「んあぁあああっ、オシリ！　オシリでイってるのぉお！」
市民にアナル絶頂を告白し、驚かせる。しかし卑語の連発に意識はなく、美少女メタルイレイザーは悦びに腰を振りまくり、放物線を遠くまで波打たせた。
半ば陶酔して我を忘れる。排泄をこれほど心地よく感じたのは初めてだ。
「あぁ……あっ、んふあぁあ…………！」
とろんとした瞳を細くし、眉の八の字に曲線をつける。しどけない唇は犬のように舌を垂らし、涎の糸を伸ばす。全身は痺れを通り越したバイブレーションに見舞われ、尻穴はひたすらバグを吐き続けた。
　プールの水が黒と茶を混ぜ合わせたような色に濁る。実際には、ヒカルは腸内を清潔にされ、出てきた液体はバグであって汚物ではない。においも消毒液のものに近い。しかし色が汚く音もひどかったせいか、人々は反射的に鼻を摘んで嫌な顔をした。

MISSION4『陵辱の夜会』より

（やっ、やだこんなの……レンとオッパイくっつけるなんて）
他人だからこそ感じる乳房に独特の柔らかさ。乳圧の変動にシンクロして身じろぐレンから胸の、特に先端の弱さが如実に伝わってくる。
姿勢の傾き次第で乳頭が交差し、敏感状態の肌はミルクにまみれてよく擦れた。
「はぁ……あっ、ヒカル、そんなに押しちゃ……」
レンが女の湿った吐息を間近に漂わせる。淫気を共有させられてヒカルも、彼女と同じ色に頬を染め、無意識に自分の乳房をヌチャヌチャと撫でまわす。
「ごっ、ごめんレン、でも……オッパイが勝手に滑っちゃって……っんぁあ！」
同性愛を強烈に思わせるレンとのスキンシップは、性的興奮を高め、肉体をますます感じやすくした。ふたり揃って肩を八の字に虚脱させ、天井を仰ぎ見るように悶える。喘ぐほどに母乳の酸っぱい香りが呼吸器官を循環し、官能的なムードに酔わされていく。
「んふう？　と、とまんないの、レン……はあっ、変な声出ちゃう……！」
「私も、んふぁ、あ……オッパイが、び、びりびりしてるの！」
先太のペニスを巨乳の隙間に挟んだまま正面から寄り添う、恥じらいに満ちた美少女のツーショットに、宴の場は俄に騒がしくなった。
「おいおい、面白くなってきたじゃねえか！」
男たちが続々と席を離れてイレイザーふたりを取り囲む。ヒカルは彼らの手にカメラを見つけて青ざめた。

「まっ、待ちなさいよ……撮っていいなんて、あたしは一言も」
「ファンサービスなんだから撮影は当然だろ？　ふたりともこっち向いて！」
話の途中で先にシャッターを切られる。他の面子も競って撮影し、眩しいフラッシュで美少女イレイザーの、いやらしい格好を浮かび上がらせた。
レンは白百合のような色合いのボディスーツを、ヒカルも、光沢だけなら金属的な質感の赤いスーツを、母乳の汁気でヌラヌラと照り返らせる。
「と……撮らないで」
小声で呟くのが精一杯のレンと、珍しく弱気になってしまうヒカル。
「やめてったら、カメラは……眩しぃ、から……」
ふたりとも顔つきは幼い割に、肉体は成熟を先取りし、多感な表情と大胆なエロティシズムを持ちあわせていた。羞恥に染まった小顔とはだけた美乳でフラッシュを浴びる。恥辱に打ちのめされて、涙ぐんでも、かえって連中の陵辱心をそそるばかり。
芳しい牝のにおいに誘われ、男の輪は次第に小さくなった。
ミルクの浸透したボディスーツが細身をギュウッと締め上げ、露出した乳房の開放を体感的にも強調する。双乳はエキスを吐き続けて乳悦を忘れさせてはくれない。手を休めた途端に煩悶が訪れ、搾乳せずにはいられなかった。
（とにかく……や、やらなきゃ）
男の視線を気持ちで振り払えないまま、レンと向かいあって胸奉仕を再開する。彼女の

巨乳がのしかかってくるせいで、谷間から飛び出す亀頭に否が応にも唇が近づいた。
醜い茸型に腫れた逸物がビクンと蠢くのが不気味だ。
ところが汚いそれに、レンがごく自然に舌を這わせるのである。
「んちゅっ、むあ……」
驚くヒカルのすぐ目の前で、恥ずかしそうに瞼を伏せながらも、剥き身に粘着質な舌を絡みつかせる。唇で亀頭表面にキスもして、コバルトブルーのショートヘアを揺らし、首まで使って舌を運ぶのだ。
「レンちゃんはわかってるね、ハアッ、特訓の成果が出てきたってカンジ？　一本あたり二回はしゃぶらせたもんなあ」
「んぉっふ！　はぁ……あ、はぢう」
人数以上の回数のフェラチオを強いられて感覚が麻痺しているのか、彼女に恥じらいはあっても、ペニスに対する嫌悪が見られない。
「あむぅ、んぁはぐっ、むぉ……はあっ、んれろ……ぢゅる！」
しかも命令なしには行動することのないレンだからこそ、彼女の能動的な奉仕は積極性に満ち溢れ、あたかも本人が望んでしているかのようでもある。雁太を至極丁寧にねぶりまわし、チュッパチュッパと吸い音を立て、唇の両端から涎が垂れてもやめない。
（そんな……レン、何やって……）
同性の興奮はヒカルの脳裏にも忍び寄り、唾液の分泌を増量させた。ゴクン、と嚥下の

音を大きくして、朱唇を薄く開閉させる。
（で、でも……あたしもさせられるのかしら……こんなコト）
口を出入りする空気が異常に熱い。淫らな刺激の足りない肉体に、精神力を削られ、頭が重たく朦朧とする。ヒカルにはもう是非の判断をくだす余裕もなかった。
「ほら、ヒカルちゃんも！　レンちゃんみたいにさ」
「あ……ん、ふぁむ」
促されるままレンを真似て、あれだけ接触を拒んだはずの赤黒い物体に、ラズベリー色の舌を伸ばす。舌の窪みに丸い亀頭をぴったりと重ねる。
「んあっ、あむ……ひはぁ、何か苦ひ……っン、味ぁひへる？」
横向きのペニスを白乳で挟み寄せて、斜めのエラと唇を水平に合わせ、チュウチュウと吸ってみる。不潔なペニスには大量の恥垢が残っているとはいえ、噎せる不味さは唾液の甘さと母乳の酸っぱさで和らげられた。
（ほんとに……あたし、やだ……おしゃぶりしてる……）
男根の形に添う舌を止められず、唾液を被せた怒張をネチャネチャと舐めまわす。
「んむ？　んあっ、ぁ……あぶぅ！　んあっぷ」
同時に自分の豊乳をレンの胸に押しつけて、弾力を確かめあった。疼きを漲らせた乳塊を伸縮させ、刺激を行き渡らせるのが心地よい。麓を引っ掴む両手に力が入って、ぐにりと指を食い込ませ、高まる乳悦を満喫する。

巨乳は互いに押しあいながら谷間で肉茎を扱きあげた。二本のペニスが網にかかった魚のごとく暴れ、女の涎にねっとりと包まれた亀頭を膨満させる。
「ヒカルちゃん、ハア、もっとレンちゃんとオッパイくっつけて！」
「俺のレンちゃんも負けてんなよ？　ハアッ、そ……そうだ、そうそう！」
レンと距離が近くなって額でぶつかり、男根同士も接触する。酔いのまわったヒカルは瞳をとろんとさせて、レンを見詰め、いつしか彼女との情交に耽っていた。
（だめ……なのに、気持ちよくなったりしたら……）
女同士だけあって表情や息遣いだけでも官能がシンクロしてしまう。レンが悶えるほど自分も感じて、液濡れの巨乳を搾り、痛痒感の集中する乳頭に熱い液体を通す。漏乳の快楽には一緒にゾクゾクと震え、蓄えた淫熱を肌で直に交換した。
「はぁんぢゅ……レ、レン……！」
ふたつの亀頭を唇で押しのけ、向こう側に舌を伸ばす。パートナーもヒカルの倒錯した欲求に同調し、涎を浮かべた舌を広げる。
「ヒ……ヒカル、んぁはぐ」
そしてふたりとも、自分の側の瘤肉を甘噛みしながらフレンチキス。美少女イレイザーは一心に舌をのたくらせて、互いの喘ぎを妨げるように熱烈にもつれあった。
「むぅぐ、あぢゅる……はあっ！　んあ、レン……あおっむ、ッン！」
「ヒはる……んちゅっぱ、ほんあに、はぁ、激ひぐひなぃれ……んぷっ、あむう」

大勢の下衆に囲まれて、ふざけた真似を強要されて。しかし接吻は命令されたわけではないし、ヒカルから誘ったスキンシップだ。

だんだん自分で自分がわからなくなって思考が混濁する。

（あたし……ほんと、どうなって……）

行為に自覚が追いつかない。快楽に先まわりされ、キスの味わい深さを反芻させられてから、いけないと思う気持ちがやってくる。その時になって情交を中断しようにも、肉体は官能的な中毒に陥り、もう少しだけ、という妥協を無限に繰り返してしまう。

著しく思考力の低下した脳は快美感でとろとろだ。

「ぬちゅっ……ぷはぁ！　ひはあ、ヒカル、らめ……わ、わたひ……んもっお」

先にレンのほうから手も伸ばしてくる。純白の美少女イレイザーは、ミルクに濡れた手で、ヒカルの豊熟した肉果実を右も左も掴み取った。握力に加減はなく、他人ならではの柔らかさを楽しむようにギュッ、ギュッと強めに押し揉んでくる。

「んぷあッ？　レン……だめったら……あっ、ぁはあ！」

途端にヒカルはトーンの高い嬌声をあげ、ポニーテールを振り乱して悶え狂った。双眸が緩やかな曲線をつけて細くなり、まなじりを緩める。頬は散らしきれない熱で赤く上気し、見るも淫猥なアクメ顔が出来上がっていく。

乳角がまた膨らんでミルクの塊を吐き出した。一回ごとの量も増え、悦痺れそのものに乳肉を牽引されるかのようだ。溢れた母乳は自他の区別なくスーツに熱く浸透し、ヒカル

もレンも女の肉体を濃厚ににおい立たせる。
唯一母乳が流れ込まない股間は愛蜜でぐちょぐちょに潤された。
（イ、イっちゃう……オッパイでイっちゃう！）
しかし果てそうなのは女壺ではなく乳房だ。圧力で潰された部分で電圧が生じ、乳芽と脳髄を快楽電流で繋ぎ合わせる。ヒカル本人は強すぎる快楽に躊躇しても、レンの手が容赦なく、張り詰めたニップルに親指を捻り込む。
「ひはあ！　はぁ、レン……はむぢゅう！」
キスを続けてヒカルもパートナーの白乳を引っ掴んだ。大きすぎるパン生地を一度にふたつ捏ねるかのようで、手に取って改めて、豊かな弾力に感嘆する。揉み応えのよさとレンのか弱い呻きにはたまらない高揚感が込み上げた。
本人は嫌と言いながら巨乳で擦り寄ってくるギャップも意欲を昂らせる。
「ヒひゃル、らめ……あっむぐ、ぉんあに強くひちゃ……っんぷあ！」
汁でヌルつく乳塊の半ばを搾り込むと、上向くニップルが盛り上がってピュッと白濁を噴かせ、レンの相貌もヒカルと同じ色の悦びを浮かべた。
腕と腕が交差して、巨乳四個に許されたスペースはいっそう狭くなり、それだけ圧力も強くなる。自分の柔らかさと比べるようにレンのふくよかな白乳を揉みしだいて、球の形に満遍なくミルクを広げるヒカルは、彼女に興奮を禁じえなかった。
（レンがすごい、こんなエッチな声で……感じてる……！）

普段は自己主張の控えめなレンの、人目を気にしてもいられないよがり姿は、同性にも刺激が強すぎる。押し揉むてのひらのほうが跳ねるような、乳房の生の感触にも嗜虐性を触発され、飽くことなく苛めてしまう。

ふたりの美少女イレイザーは搾乳の快楽を求めあうのみならず、勃起を増強する亀頭をれろれろと舐めたくり、互いの胸に自分の胸を乗せるように肉体を躍らせた。

「ぷあっ、ぉも……レンっ、あはひ、変に……へんぃなっひゃう！」

「わたひおっ、私も、ひぁるとイク、はあっ、おっぱひれ……んぷはぁ！」

母乳の通り道は過熱を極め、痺れと痺れの間隔が短くなる。相方に押し揉まれ、谷間では男根と擦れる肉果実が、乳芽をぷっくりと盛り上がらせる。

「はぁぷっ、ぢゅる！　……れあっ、あ、ぁぐぅむ」

酸素が足りない。それでも唇は腐肉に吸いつくのを優先するくらい、頭の中は淫らな気配で満たされた。法悦の波は理性の堤防を軽く越えて、次から次へと快美感を伴って押し寄せ、ヒカルもレンも腰をくねらせよがってしまう。

「レンの……はあっ、れんの味、んちゅ、すぉいひへる……酸っらひゅって」

近いほうの亀頭を涎まみれにしたら、胸の谷間で交換し、パートナーの唾液に雁首まで覆われたもう一個も吟味する。

「ひひゃるのも、んちゃっ、ふおぃ……むぉひいの」

二本のペニスが美少女ふたりの濡れた唇を行き来し、粘性の糸を繋ぐ。

ビデオカメラを構える男が興奮気味にヒカルたちを撮影した。
「エロい顔して……見ろよ、どっちも喜んでチンポ舐めまくってるぜ！」
好きで始めたはずではないのにやめられない。汁の混ざる音は大きく、酸っぱいにおいは濃くなって、淫らな情交に耽っている自分自身をはしたなく思っても。
（あ……あた、し……こんな……ヘンタイみたいなコト）
羞恥で荒れる感情に涙さえ滲ませても、パートナーの乳房をいたぶる手は止まるどころか、激しくなって、唇は牡肉にしゃぶりつく。舌の裏でも亀頭表面を練磨して、レンの吐蜜を回収し、口の中で甘くなるまでかき混ぜる。
「はむちゅ……ンっ！　……ぁはあ！」
たっぷりと反芻したら、呑みくだし、また谷間でペニスを交換する。
（すっごくヘンなコト……してる、のに……あたしも……レンも）
アブノーマルな行為に興じ、股を濡らすのが当たり前になってきた。肉体の快楽は絶頂に乗りかかり、あれこれと考える余裕はない。頭がぼうっとして、一時の浅ましい欲求を満たすためだけに手首を返す。
「はあっらめなの、レン、あらひっ、んも……ちゅぱ、もぉイっひゃふうッ！」
「私、も……ぉもお、イぐ……いぁるとイク！」
そうしてパートナーの乳房を搾りながら、自分も搾ってもらう。涎で汚れた唇から潤沢ある舌を垂らして、小刻みに先端を操り、黒ずんだ亀頭を丹念に舐め尽くす。

淫猥な切なさを秘めた瞳で見詰めあう美少女イレイザーの、行きすぎた痴態には、男のほうが耐えられない様子だった。
「すっすげえよ、ヒカルちゃん！　しゃぶりすぎだって、ハア、もう出る！」
「俺もガマンできねえ！　ハアッ、レンちゃんにぶっかける！」
二個の瘤肉が傘を突っ張らせて熱化し、爆ぜる。ゴボゴボと湧き水のように溢れる汚濁は拍動に押され、宙に飛ぶまで噴出した。
ドビュッ！　ビュクン、ドビュ！　ドクンッ！　ドクン、ドクン、ドクン！
メタルイレイザーの少女たちも感じやすい巨乳で女の臨界に達し、精を噴くペニスを谷間で挟みながら、アクメの恍惚に屈服する。弾けるような快楽電流が肉体を迸り、開放感とともに甘美な陶酔感が到来した。
「イクッ！　あっ、ああ、あ！　イっちゃうぅうううぅぅうううう――――――ッ！」
パートナーの乳房を鷲掴みにして、エクスタシーに打ち上げられるヒカルと。
「おっぱひが、んふあ……あぁあああぁぁあああああッ！」
春声を一にしてヒカルの乳果を搾り上げるレン。緩みっ放しの相貌に灼熱のスペルマを浴びながら、乳肉が潰れるくらいに密着し、互いの細腰をかき抱く。ふたりはひとまわり太くなった乳頭から、ホースの先を狭めたような勢いで噴乳した。
ブシュウウウッ！　ビュルッ、ビュルビュルビュル！　ビュルビュルビュル！
噴乳絶頂に陶然自失とする。

「あああっ、レン、あたし……あたしのオッパイ、びくびくって……！」
「私のオッパイも、あ……溢れるっ、だめ……んふぁああ！」
不特定多数の男に囲まれて、すべてを見られながらのオーガズム。大勢の前で体液を漏らす背徳の心地よさなら知っていた。公衆の面前で用を足し、市民プールでは肛門を派手に噴かせた、あの瞬間の悦楽が蘇る。
（だめ……き、気持ち……よくって……！）
母乳の放物線が上に向かって、高くなるにつれ、歓声も大きくなった。衆人の反応が官能を大幅に増幅させる。見られるという被虐の刺激がヒカルにはたまらない。
降り注ぐ母乳は発情した肉体を上まわって熱く、ヌルヌルと伝うのが感覚でわかる。密着状態でひしゃげた生乳から、両脇に流れ、膝立つ下半身にも流れていく。ボディスーツは色をみるみる深く染めてジュクジュクの汁気を蓄えた。
股間に隠した女の部分でも感じたくなって、ヒカルはこっそりと脚を開く。期待の通りに乳汁は股座を通過し、太腿の内側にも染み渡った。
ヒカルのスーツが赤いせいか、ミルクをかけられたストロベリーに近い色合いだ。母乳に特有の酸っぱいにおいが身体じゅうから溢れてくる。
顔からは粘り気の強いスペルマが剥がれない。だが「くさい」とか「汚い」と思う先入観は沈黙したまま、牝を発情させる濃厚な青臭さに鼻を疼かせてしまう。
舌舐めずりもしてヒカルは、牡汁の臭味も堪能し、はあっと甘い声で色めいた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/